

編集後記

二〇三年は、鴨長明の『方丈記』が書かれてちょうど八百年目に当たる記念の年であった。『方丈記』跋文に、建暦二年（〇三二）の三月末にこれを書いたとある。『方丈記』といえば、流れ行く水に無常観を重ねた冒頭の文章があまりにも有名であるが、東日本大震災や関東東部の竜巻、和歌山県の水害など、災害がうち続いたこともあって、冒頭文に続く災害記事が「災害ルボルタージュ」としても注目を浴びた。特に京都を襲った辻風（竜巻）と大地震の描写は、建物が倒壊し津波が襲う様子や竜巻に巻き込まれて空を飛ぶ様々な資財道具のありさまなど、まさに現代のテレビに映し出された映像と同じ光景を彷彿とさせる迫力である。災害の渦中の「人と栖」の無常を説き、それに対置するものとして方丈の庵での閑居のすばらしさを記すが、しかし終章ではそれもまた無常であり、執着ではないのかと自問自答して終わる。『方丈記』の最後で長明は悟ったのか、それともまだ迷いの中にあつたのか、国文学界ではなおも論争が続いている。研究分野によっては、足して二で割るような解答が得られない問題も多い。それでもできるだけ真実に近い地歩をめざし、日々努力を重ねているのが研究者であろう。その過程で得られるものも多く、それもまた研究の喜びであると思う。

今年も第四五号をお届けすることができた。健筆を振るって下さった先生方に御礼を申し上げます。また佐藤方美先生には、二年にわたって編集にご尽力いただいた。記して感謝申し上げます。

（文学部長・新間 水緒）

花園大学文学部研究紀要 第四五号

二〇一三年三月一〇日 発行

非売品

編集兼
発行者 花園大学文学部

代表者 新間 水緒

発行所 花園大学文学部

京都市中京区西ノ京霊の内町八一—
電話（〇七五）八二—一五二八二（代）